
僕らの15年間

純粹すぎた夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの15年間

【Nコード】

N1737J

【作者名】

純粹すぎた夏

【あらすじ】

高校の入学式に行くはずだった12人の高校生達。

しかし、彼らが連れてこられたのは希望の道という名の施設だった。母子家庭で育った矢吹豊は自分の母親を殺さなければ自分が殺されるゲームをその施設で強要される。

お金がないことを理由に自分の才能を潰されていくことに不満を感じ、母親を憎んでいた矢吹豊は母親を殺せるのか。

矢吹豊を先頭にゲームは始まる

罪と罰

ああ、あの時欲張らなければよかった

欲張りさえしなければ、僕はこんな世の中に生まれてはこなかったはずだ。

もし、もう一度やり直せるなら、僕は他の精子に道を譲るだろう。

そう、この世の中は欲張り者の集まりだと思う。

あの時、欲張った罰が今僕に与えられているのかもしれない。

ああ、あの時欲張らなければよかった

欲張りさえしなければ、僕はこんな世の中に生まれてはこなかったはずだ。

もし、もう一度やり直せるなら、僕は他の精子に道を譲るだろう。

そう、この世の中は欲張り者の集まりだと思う。

あの時、欲張った罰が今僕に与えられているのかもしれない。

僕は矢吹豊^{やぶきゆたか}高校一年生。

本来なら今日は高校の入学式に親と一緒に行くはずだったが

僕が連れて来られたのは目的地とは明らかに違う静かな場所だった。

今の時代には珍しい木造建ての施設（希望の道）の前で僕は車から降ろされ

施設の中にある一つの個室へと連れて行かれた、僕と同じくらいの子供が何人か椅子に座っている。

「母さん、ここ僕が入学する高校じゃないよ？」

「いいからここに座ってなさい！……ごめんね」

「え？母さんは逃げるように僕の前から姿を消す

母さんが言ったごめんねの意味を僕はこれから吐き気がするほど味

わうことになる

そして、この言葉に僕は苦しめられるなんて思ってもいなかった…

…。

15歳の僕ら

慣れない空間はとても息苦しい、口の中がパリパリに渴いているそれは周りの人も同じなようだ、皆そわそわして落ち着きがない。

「あれ？もしかしてゆーちゃん？」

聞き覚えのある声がした。

「ん？おお、空に由佳……それと、ながちゃん」

「おいおい、俺が男だからって呼ぶ時にテンション下げないでくれよあ……」

そう言いながら、ながちゃんは苦笑する、それにつられて、僕と由佳は笑った。

ながちゃん達とは小1からの付き合いだ、僕はこの時救われたと思った。

空達に出会うまでは、これから何をするかも分からない入学児の気持ちだった。

不安、緊張、孤独が一気に襲いかかってきた。

しかし、空達に出会ったことで孤独が消え、不安や緊張は和らいだ。仲間がいることで、こんなに安心したことは今までなかったかもしれない。

そんな風に現実逃避に成功している時、声を震わせながら空が言う。

「ねえ、なんで私達はこんな所にいるの？ここ絶対におかしいよ、

親もおかしかったし……」

一瞬空に腹が立った、それは由佳もながちゃんも同じだろう

そして、予感が当たったとなるとなおさらだ……。

大人が暇潰しで開催する残酷なゲーム

——ガラッ！

ドアが開く音とともに、スーツ姿の一人の男が個室に入ってきた。

「えーちよつと皆座ってくれ」

普通そうな人だった、これが悪夢の始まりだと、僕は気付きもしなかった。

「私の名前は夏目だ、突然だが、君達はなんでここにいると思う？」
静まりかえる、当然の反応だ

「単刀直入に言おう、お前らは売られたんだ、自分の親に」

疑いたかったが、自分の親を思い出すと完全に否定できなかった
周りがざわざわと騒ぎ出す、皆も否定できないことに苦しんでいる
んだろう。

「——いいものを見せてやろう、起立！廊下で一列に並んでくれ」
皆素直に従う、従うしかなかった。

僕らはグラウンドに連れて行かれた、そして何十人もの人達が楽し
そうに上を見ている

それにつられて、僕らも上を見た、見てしまった……そして、一
気に体が硬直した。

屋上で同じ年くらいの子が二人、地面を背に懸垂をしていた、手を
離したら地面に落ちてしまう。

すると、一人が力尽きて静かに落下してきた、悲鳴を上げる余裕も
なかったのだろう。

静かなグラウンドに肉の塊がうちつけられた、——ボゴッ、この音
を聞いた瞬間、僕は本能的に吐き気を覚えた。

「ぐぎゃあああああ！！」

幸か不幸か死ななかった、右腕がありえない方向に曲がっている。
楽しそうに見物していた人達の笑いはさらに不気味になる。

「ごめんなさいと言ったら治療してやるぞ、親に見捨てられた不幸

者君」

——親に見捨てられた……不幸者？

「ぐ……ああ！ごめんさいごめんなさいごめんなさ……」

その瞬間、見物していた男はスーツの内ポケットから銃を取り出し不気味に笑う

「残念、嘘だ、喜べこの俺が殺してやる」

バンッ——男が銃を撃ち、落下してきた人は涙を流しながら死んだ、辺りが急に騒がしくなる。

「騒ぐな！！」

普通そうだった夏目が急変、それに合わせて周りは静かになる。

「これはゲームだ、4人で1チーム、12人いるから3チーム出るな。勝った者は生き、負けた者は死ぬ。種目は私が引くクジで決まる、種目が決まったら私が参加する者1名を選ぶ。5戦戦って生き残った奴が一番多いチームには1人1人に2億やる、一生遊んで暮らせるぞ！質問はあるか？」

その時、可愛い金髪ショートカットの子が腕を挙げた。

「はい！あの……どうして私達はこんなことをしなきゃいけないんですか？」

そう、誰もが疑問に思っていること、どうしてこんなことをしなきゃいけないのか。

「最初に言ったようにお前らは売られた商品だ、運動会でいう、あそこで見物している方々が親、そしてお前らが子供、子供は親を楽しませないと駄目だろう？」

僕らはいいつらに買われたらしい、暇潰しの商品として……。

全員で襲えばもしかしたら倒せるかもしれない、だがもし僕が夏目に襲い掛かっても誰もついてきてくれないだろう、秋葉原殺傷事件を見れば分かる。

皆で行けば相手を倒せるのに皆自分が傷付くことを恐れる、皆見てみぬふり。

「それでは、4人で1チームを作れ、10分以内にだ！いいか、誰

も信じるな、また裏切られなくなかったらな。政府は何もしてはくれんぞ、あいつらは金さえやればすぐ見てみぬふり、すぐ黙る」その時、夏目の顔がなぜか悲しそうに見えた、なにかを思い出しているような。

しかし制限時間は10分、そんなことを考えている場合ではない。チームを作れと言っておきながら、誰も信じるなと言う……非常だ。暗黙のルールというやつか、空、由佳、ながちゃん、そして僕はチームを組んだ。

名前	年齢	身長	外見的特徴
矢吹豊	15	172	黒髪 ブレザー着用
長野隆行	15	164	茶髪 ブレザー着用
南条空	15	163	金髪 ブレザー着用
白井由佳	15	161	茶髪 ブレザー着用

次の日、夏目が種目の発表をしてきた。種目は「母親殺し」

ルールは母親を刺殺すればいいだけ、簡単だ、参加選手には僕（矢吹豊）が選ばれた。

ナイフは貰った、家の前にも着いた、あとは殺すだけだ。

矢吹豊？

「お母さん今日ねー」

――僕は父さんのことをよく覚えていない、僕が年少の時に過労で死んだ。

母さんは今まで女手一つで僕を育ててくれた、そんな母さんに僕はとっても感謝していた、小6までは。

「お母さん、僕野球がやりたい」

そうお願いしたのは小3の時だった、偶然友達のお父さんとキャッチボールをした時

「矢吹君良い球投げるねー、頑張ればプロになれるよ、野球やってみないかい？」

そう言われて一回チームの練習にまぜてもらった、楽しかった、皆僕のことを褒めてくる。

絶対にプロ野球選手になってやる、そう思っていた、それなのに――
「野球？んー、お母さん仕事で忙しいし、お金もいっぱいかかるから今回は止めておきなさい、チームに入らなくても野球はできるでしょ？」

そんなんじゃない、そんな返事なんか期待していなかった、何度も必死に説得したのに全て権力で押さえ込まれた。

その後も塾、空手、水泳、全て今回は我慢しときなさいと言われた。そして5度目のお願い……小6の時だ

「母さん、僕私立の中学校に行きたい」

「なんで？公立の方がいっぱい友達いるよ？」

「僕、いっぱい勉強して弁護士になりたいんだ」

「そうなんだあ、でも、お金かかるし、友達いた方が楽しいから、今回は公立にしておきなさい」

僕は奥歯を噛み締める、まただ……また母さんのせいで僕の才能が潰れた

その時、追い討ちをかけるようにテレビから子供を馬鹿にした言葉が聞こえてきた

「最近の若者は個性がありませんねえ」

個性がない？大人は簡単に子供の才能を潰すくせに……僕は鋭い表情で母さんを殴りつける、その弾みで倒れた母さんの反論をさえぎるように

「母さん、そんなにお金ないなら体売りなよ」

「なっ……あんた意味も知らないくせにそんなこと言わないの！」

「知ってるよ、知ってないと思いたいだけだろ、そういう大人のワガママが子供を殺していくんだよ、母さん、体売れよ、これ以上僕の才能を潰さないでくれ」

母さんは泣き崩れた、顔をくしゃくしゃにしている、そんな悲しい顔されても僕は謝る気にはなれなかった。

母さんは優しい、優しいけど、親には向いていなかった。

子供のいうことを聞く、こんな当たり前のことができないんだから。

矢吹豊？

正直、僕は母さんのことが大好きだと胸を張って言えない。

母さんのエゴで僕は苦痛を背負わされたのに母さんは僕を産んだことに罪悪感を感じていない。

いい加減に気付けよ……僕は産まれなくなかった、死ぬことに怯えなくなかった。

親になったからには子供の言うことを聞くべきだ

金が欲しいと言われたら金を与え、死んでくれと言われたら死ぬ、全部子供優先、それが礼儀だ。

だから母さん、死んでくれ、それが、親の宿命だ。

——母さんは家の中の居間に居た、唇を噛み締めながら僕は言う。

「……母さん」

「……ゆーちゃん？」

「どうして僕がここにいるか分かる？ 母さん僕を売ったよね？ そこで母さんを殺さないといけなくなっただよ」

無意識に目つきが鋭くなる。そして、僕は右手に持っていたナイフを母さんに見せ付ける。

「……そうね、ゆーちゃんを見捨てて生きようとした母さんが悪いわ……因果応報ってやつね。ゆーちゃん、母さんこんなこと言える立場じゃないけど、母さんのお願い……言ってもいい？」

「……！！」

口の中で歯と歯が擦れる音がした。心が痛かった、ここで逆ギレさえしてくれれば楽に殺せたのに。

「ゆーちゃんにもう一度母さんの料理を食べてもらいたいの、母さんの味を残したい、最後のワガママ……聞いてくれる？」

腹が立った、心底ズルイと思った。

「……カレー」

「ん？」

「カレーが食べたい」

これが最後のワガママになるかもしれない……母さんにとっても、僕にとっても

殺せないかもしれない、素直にそう思った。

30分程そんなことを考えていると、家中をカレーの匂いが広まっ
ていく

「はい、ゆーちゃん」

優しい顔だ……。

「あ……うん」

カレーだ、ご飯とルーを半分に分けてある僕が好きなカレー、覚えて
いてくれた。

しばらくは黙々とカレーを食べていたが、僕は一番聞きたかったこ
とを唇を震わせながら言う。

「あ、あのさ母さん……どうして僕を売ったの？」

心が痛かったが、どうしても真相を知りたかった、どうして僕を売
ったのか。

「この不景気な時代、政治家達は自分の給料を下げないで他人の給
料ばかり下げるでしょ？それを見てるとなんかね……1人1人役割
があるのはわかるけど、よりによってその役割が貧乏人なんて、ど
うしても嫌だったの」

唇を震わせながら、何かを睨みつけるように母さんは言う。

殺意がわいた、今なら殺せる、僕はナイフの先端を母さんに向けた。

「母さん、それじゃ」

……足を踏み出せない、僕は無意識の内に母さんの返事を待ってい
た。

「ゆーちゃん、こんな母親でごめんね……」

「……！……」

弱々しく、清々しい顔で母さんは言うてきた。僕の目が泳ぐ、駄目

だ、殺せない。

「まただ……またごめんねって言った、母さんはズルイよ、母さんが憎くて堪らなくなるほど僕を罵ってくれたら楽に殺せるのに！なんでかなあ？たまに優しくされただけに、なんで殺したくなるのかなあ？勝手に産まれて、勝手に見捨てられて、それなのになんで憎めないんだよ……どうして僕はいつも中途半端なんだよ！どうして嫌いにさせてくれないんだよお……」

（ピピッピピッ……）

時間だ、結局母さんを殺せなかった。

——ガラッ！

スーツ姿の男2人が入ってきて——

パンツパンツパンツパンツ！！

頭部に2発腹部に2発、抵抗する間もなく僕は殺された。今度生まれ変わるなら人間以外になろう

こんなに残酷で、こんなに優しい、これほど中途半端な生き物、他にいるのかな？——

「……馬鹿な子」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737j/>

僕らの15年間

2010年10月11日14時35分発行